令和5年度　入学試験問題

国　語

（50分）

注　意

1　この問題用紙は、試験開始の合図で開くこと。
2　問題用紙および解答用紙に受験番号・氏名を記入すること。
3　答えはすべて解答用紙に記入すること。
4　**字数制限のある場合は、特別な指示がない限り、すべて句読点や「　」（　）などの記号を含んだ字数として解答すること。**
5　印刷がわからない場合は申し出ること。
6　試験終了の合図でやめること。

東京都市大学等々力高等学校

受験番号		氏名	

一

次の――線の漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直して答えなさい。

1、有名な画家が急逝した。
2、慎ましく暮らす。
3、暫時の休暇をもらう。
4、神が顕現する。
5、他人を慮る。
6、坑道でキンカイを掘り当てた。
7、ソボウなふるまいを改める。
8、グドンな人間にはなりたくない。
9、あの政治家は時代をサクゴしている。
10、親が子どもをサトす。

二

――線の言葉が正しく使われているものは1、そうでないものは2として、それぞれ番号で答えなさい。

ア、何をされても動じずに毅然（きぜん）とした態度をとる彼は、面の皮が厚い。
イ、毎晩悪夢にうなされているため、枕を高くして寝る。
ウ、竜頭蛇尾に終わってしまわぬよう、先を見越した計画を立てる。
エ、いつも温厚な先生に怒鳴られたことで、教室の様子は水を打ったようだ。
オ、ショップ店員が客にお世辞を使って褒める様子は、まさに売り言葉に買い言葉だ。

三　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

長女幸（さち）・次女佳乃（よしの）・三女千佳（ちか）の三姉妹は、父親に続いて母親も家を出てから三人で鎌倉で暮らしている。三姉妹は、家を出た父親の葬儀でもう一人の異母妹すずに出会った。すずは父親の三番目の妻である陽子と暮らしているが陽子との血縁はない。父親の葬儀も終わり、すずは三姉妹を駅まで送る。

佳乃たちは横一列になって田舎道を歩いた。蟬の声は相変わらずやかましいのに、やけに静かに感じる。

遠くから声が聞こえた。振り返ると、セーラー服姿の少女が追いかけてくるのが見えた。

「どうしたの？」

「渡したいものがあって」

息を切らして駆けてきたすずは、幸に向かって古びた封筒を差し出した。

「これ、お父さんの机の中に入ってて」

受け取る幸の指先に、かすかな緊張が見て取れた。佳乃と千佳が左右から覗（のぞ）き込む。

「あー」

千佳が楽しげな声を上げた。佳乃もぐっと身を乗り出した。

封筒から出てきたのは、数葉の写真だ。

「えー、これ、お姉ちゃん？」

「これ、花火大会だね、鎌倉の」

「これ、憶えてる。江ノ島」

「こん時、千佳、迷子んなってえらい騒ぎになったんだから」

「おまけに案内所でウンコもらしたのよ」

「えー、そうだっけ？」

どの写真にも三姉妹の誰かが写っている。十五年前の姿で。

煙が上っていった空から降り注ぐ日差しが、①古い写真をきらめかせる。記憶の底に埋もれていた様々な場面が、奔流のように溢（あふ）れ出してくる。

「それじゃ」
「あ、待って」
お辞儀をして去ろうとしたすずを、幸が呼び止めた。振り向いた彼女の額に汗が光っている。
「時間ある？」
「え、はい」
幸は腰を屈め、戸惑うすずに目の高さを合わせた。
「この街でいちばん好きな場所ってどこ？」
幸の問いかけは唐突だったのに、佳乃はそれが自分の口から出たもののように感じた。横目で見れば、千佳も当然のような顔で微笑んでいる。
幸い、電車の時間までにはかなり余裕があった。すずはためらいつつも、急勾配の山道に異母姉たちを誘った。
「でもさあ、だいじょうぶかな、あの子」
最後尾でかなり遅れている佳乃を待って、千佳がぽつりと言った。
「ん？」
「ここでやっていけんのかなあと思って」
「うん。あの子、陽子さんとは何の関係もないんだもんね」
陽子は母に似ている。あまり重い荷物は持てない人だ。しかし心配したところで、佳乃たちが口を出すことではない。
なんとか登り切った山道の先には、小さな神社があった。佳乃がたどり着いた時、すずと幸は境内の端にある柵の前に並んでいた。背格好はまったく違うのに、その後ろ姿が似ている気がするのは、先入観のせいだろうか。
「わあ、いい眺め」
歓声を上げた千佳が幸の隣に、佳乃がすずの隣に駆け寄った。
「お父さんとよく一緒に来たんです」
初対面の姉に挟まれたすずは、顔を正面に向けたまま遠慮がちに言った。
苦労して登ってきただけあって、そこからは街が一望できる。山に囲まれたすり鉢のような土地に、鮮やかな黄緑の田が広がり、昔ながらの家々が身を寄せ合っている。小さな街は、手のひらで掬(すく)えそうだ。
「ねえ、なんか似てない？」
佳乃の言葉に、千佳がすぐ反応した。

「うん、あの向こうに海が見えたら鎌倉だよね」
「でしょ？」
幸がすずアのほうに顔を向けた。すずの隣にいる佳乃からも姉イの表情が見えた。いつも叱られてばかりいる佳乃は長らく見ていない、やわらかい表情だった。
「すずちゃん、あなたがお父さんのこと、お世話してくれたんだよね？」
すずは肯定していいものかどうか迷っているようだった。うなずいたのかうつむいたのかわからない仕種で下を向く。
「お父さん、きっと喜んでると思う」
幸はすずウの肩を抱いた。その手はきっとあたたかいのだろう。
「ほんとにありがとうね」
すずの黒い髪がかすかに揺れた。うなずいたのかどうかは、やはりわからない。だが涙を堪えているエのは、顔が見えなくてもわかった。
「ありがとう」
佳乃もすずに体を寄せた。
「ありがとうね」
千佳も笑顔を近づけた。
②透明な雫が一粒、すずの目から零れた。
それから四人は連れだって駅に移動した。幸と佳乃がすずを挟んでベンチに座り、千佳はホームを歩き回ってそこかしこに散った花びらを拾い集めている。鮮やかなピンクの花は、たぶん百日紅だ。鎌倉に咲いている花が、この街にも咲いている。
「この街、好き？」
幸の質問に、すずは曖昧に首を傾げた。
「好きっていうか、こっちへ来てまだそんなに経ってないんで」
それまでは父とふたりで仙台に住んでいたという。
「でも、なんでお父さんがここに住みたいって思ったのか、わかりました」
佳乃の脳裏に、神社の境内から眺めた景色がよみがえった。父は鎌倉を、捨てた家族が住む地を、懐かしく思っていたのだろうか。
嵐のような蟬の声に混じって、電車の音が聞こえてきた。視界を遮る建物もないから、赤い車体は遠くからでもよく見えた。車輪が軋り、剝げかけた「ワンマン」の文字が目の前で止まる。

順に乗り込んだ千佳と佳乃は、見送るすずに口々に声をかけた。
「じゃあね」
「元気でね」
③すずはいちいち律儀に「はい」と答え、それから少し間を置いて付け足した。
「お姉さんたちも」
最後に乗り込んだ幸が、まっすぐにすずを見つめた。
「すずちゃん、鎌倉に来ない？」
すずはすぐには意味が摑めなかったようだ。佳乃と千佳も驚いて顔を見合わせた。
「え……？」
「一緒に暮らさない？　四人で」
千佳の口もとがしだいに緩み、目が三日月の形になっていった。佳乃の表情も同じような変化をしているのだろう。
幸が妹たちの顔を見た。佳乃も千佳もにっこり笑った。
「あたしたちの家、すっごく古いけど大きいの。みんな働いてるから、あなたひとりぐらいなんとかなるし」
幸の言葉を裏付けるよう、ふたりして深く頷いてみせる。
④すずの頬に血の色が上り、大きな瞳が揺れた。
「でも……」
「すぐ決めなくていいから」
戸惑って当然だろう。この場で決められるはずがない。
「ちょっと考えてみてね」
「またね」
手を振る佳乃と千佳に、すずは忙しなく視線を向けた。それからまた幸を見た。
長い睫毛が伏せられる。迷いに幕を下ろすように。
「行きます」
すずが再び目を上げた時、ちょうどドアが閉まった。ドアは耳障りな音を立てたが、澄んだ声ははっきりと聞こえた。
ガラスの向こうからすずが見つめている。⑤わずかに頬をこわばらせて、けれど瞳には決意をたたえて。

動きだした電車の窓に張りつくようにして、佳乃たちは手を振った。伝わることを願って、待ってるからね、と口を動かす。

すずの顔にぱっと笑みが広がった。出会ってから初めて見る笑顔だ。

彼女は電車を追って走り出した。高く上げた片手を大きく振り、やがては両手を頭の上でぶんぶん振った。ホームの端ぎりぎりで立ち止まってからも、ずっと振り続けていた。

それから、佳乃たち三人は父の遺産の相続を放棄した。

そして蟬時雨のやむ頃、姉妹の家に末の妹がやってきた。

（高瀬 ゆのか「海街 diary」より）

問　一、――線①「古い写真をきらめかせる」とありますが、それはどのようなことを表していますか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、古い写真に写る日々は今ではくすんでしまった思い出だが、日差しを浴びると実際より美化されて思い出されるということ。

イ、本来はきらめくばかりの思い出の日々が写った写真なのだが、時間の流れがそのきらめきを消失させそうだということ。

ウ、経年劣化で本当は古びた写真なのだが、日差しを反射して、まるで最近撮影したばかりの写真のように見えるということ。

エ、姉妹の心の中にあった記憶が高揚感と共に鮮烈な色彩を帯びて蘇り、あたかも光彩を放つかのようであるということ。

問　二、――線②「透明な雫が一粒、すずの目から零れた」とありますが、「透明な雫」が「すずの目から零れた」のはなぜですか。そのきっかけとなった会話文を文章中から一文で探し、最初と最後の五字を抜き出して答えなさい。

問　三、――線ア～エのうち、他と文法上の意味が異なるものを一つ選び、記号で答えなさい。

問　四、この小説の語り手は、四姉妹のうち誰の心情に最も寄り添っていますか。文章中から人物名を探し、抜き出して答えなさい。

問五、――線③「すずはいちいち律儀に『はい』と答え、それから少し間を置いて」とありますが、すずはなぜそのような態度をとったのですか。その理由を説明した次の文の空欄にあてはまる言葉を文章中の言葉を使って、二十字以内で答えなさい。

初対面の異母姉たちに対する［二十字以内］があるから。

問六、――線④「すずの頬に血の色が上り、大きな瞳が揺れた」・⑤「わずかに頬をこわばらせて、けれど瞳には決意をたたえて」とありますが、それぞれのすずの心理描写の説明として適当なものを次からすべて選び、記号で答えなさい。

ア、④にはすずの興奮と大きな感激が描かれており、⑤ではすずの頑なな思いとそれに抗おうとする心情が描かれている。
イ、④にはすずの大きな驚きと動揺が描かれており、⑤ではすずの動揺を乗り越えた強い心の在り方が描かれている。
ウ、④も⑤も「頬」と「瞳」が対句的に用いられており、「頬」には深層心理が、「瞳」には表層心理が描かれている。
エ、④も⑤も「頬」と「瞳」が対句的に用いられており、「頬」には表層心理が、「瞳」には深層心理が描かれている。

問七、この文章の表現の説明として適当なものは1、適当でないものは2として、それぞれ番号で答えなさい。

ア、短い会話文を多用することで、読者が臨場感を持って読み進められる文章構成となっている。
イ、登場人物たちの豊かな表情がそれぞれの個性を際立たせ、しだいにその個性が融合してゆく様を生き生きと描いている。
ウ、三姉妹の饒舌（じょうぜつ）とすずの寡黙を対比させることで、すずの主体性に欠ける性格を暗黙のうちに示そうとしている。
エ、鮮やかな色彩のみならず聴覚をも刺激する描写があり、季節感を明瞭に感じさせる工夫がなされている。

問題は次ページに続きます。

四　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。なお、設問の都合上、本文には一部省略した箇所があります。

①多くの人には「知識なり、技能なりは伝えることができる」という信念があると思う。先生なり師匠なりが、何らかの適切な方法を使えば、彼らの中にある知識、技能が、生徒、弟子に伝わるはずだ、と考えている。［A］、知識は持ち運んだり、誰かに渡したり、誰かから受け取ったりできることを意味する。実際、何かを教わってできるようになった経験は誰にでもあるだろうから、知識は受け渡しが可能であると考える人は多いと思う。

こうした信念の表れは「図書館は知識の宝庫だ」、「本は知識の泉だ」などという言葉にも表れている。書籍には先人が発見した、獲得した知識が記載されており、それを読むことで知識が得られると考える。また学校では知識や技能を教えると言われる。先生は教科書を使い、さまざまな事柄を教える。漢字の読み方、北斗七星の現れる場所と時期、因数分解の仕方、ブレトン・ウッズ体制（注1）、さらには給食の食べ方まで、いろいろな種類、構造の知識を伝えようとして努力されている。これは知識は誰かから誰かへ伝わると信じているからだ。

［B］、残念ながらそうではない。書物は知識を文字に表したものであり、それ自身は知識ではない。「リンゴ」という文字、言葉が、本物のリンゴではないのと同じことだ。［C］書物を読んでも、そこから知識を得ることはできないのだ。それが表すのは「情報」であり、［D］それを覚えたとすれば「記憶」となる。同様に、先生たちは知識を教えているのではない。それは右の例と同じ理由だ。先生が伝えるのは情報で、運良く生徒がそれを覚えればその生徒の記憶となる。しかしそれらは伝えられただけであり、もしそのままならば単に記憶、情報としてとどまるだけなのだ。［ア］

ここまで読んでこられた読者は、「お前の言う知識とはなんなんだ」と言いたくなると思う。伝統的な哲学では、「正当化された、真なる信念」と言われる。キーワードが3つあり、それが知識の3つの条件となっている。第一に、「真なる」という言葉が示すように、それは真、つまり正しくなくてはならない。第二に、「信念」というわけだから、それを信じていなくてはならない。そして最後に、「正当化された」とあり、それは真である根拠が存在するということである。

ただ私はここで②そういう知識を取り上げたいわけではない。［1］な知識について考えてみたいのだ。役立つ、意味のある知識といってもよい。というのも、右の定義で言うと「私の目の前のクレジットカードの上にUSBメモリーがある」というのも知識になるからだ。これは私以外の人にはなんの役にも立たないし、意味もない。つまり、［2］ではないからだ。［イ］

さて、［3］性を持つ知識というのは、以下に述べる3つの性質を持っていなければならないと思う。1つめは一般性である。一般性とは簡単に言うといろいろな場面で使えるという性質を指す。ウガンダの首都は多くの日本人にとって使う場面はほとんどない。せいぜい早押しクイズの

ような場面でしか使えない。そうしたものは一般性を持つとは言えない。重力加速度が9・8m／s^2ということを覚えるだけであれば、小学生でもできるだろう。しかしそれは知識ではない。それを用いて考えることができないからだ。

もう1つの性質は関係性である。孤立した知識はほとんど何の役にも立たない。知識というのは他の知識とリッチな関係を持っていなければならない。昔日曜日の朝早く電車に乗っていたら、これから塾に行く小学生たちが、「イワンの馬鹿」、「トルストイ」、「赤[注2]と黒」、「スタンダール」などと言い合っていた。これは本当に意味がない。イワンの馬鹿がどんな小説であり、トルストイがどんな人物であるのか、どんな時代に生きたのか、なぜトルストイはそんな小説を書いたのか、原題となったものは何か、そういうことが繋がらなければ、クイズ王くらいにしかなれない。

最後は場面応答性である。知識はそれが必要とされる場面において発動、起動されなければならないというのが場面応答性である。重力加速度についての知識は、それが必要となる場面で、例えば落下物体の速度を求めるという場面で起動しなければならない。恋人のことを考える時、テレビのチャンネルを変える時にそれが発動しても役に立たない。

このように知識を捉えると、ある事柄が伝えられた途端、知識として定着することは原則的にないことが③容易に理解できるだろう。伝えられた事柄、本で読んだ事柄がどのような範囲をカバーするのか、それは他の知識とどう関係するのか、そしてどこで使われるのか、そうしたことを考える作業を行わない限り、その事柄は単に記憶としてしか存在せず、知識とはならないのだ。ウ

こういう考え方を構成主義（constructivism）と言う。相手からの情報、その記憶が知識となるためには、それらの素材を用いて知識として構成していかなければならないのだ。構成するのはもちろんあなただ。あなたのこれまでの経験は人と異なるだろうし、これから出会いそうな場面も異なるだろうから、構成される知識は人によって少しずつ異なってくる。より多くの関連した知識と結びつきを作ったり、その知識がカバーする事柄をたくさん経験した人が構成する知識は、単にクイズのように覚えた人のそれとはまったく異なったものとなる。難しい言葉で言えば、④知識というものは「属人的」なものなのだ。エ

いくつか補足しておきたい。「自分で考えて」と言ったが、それは何も意識的に考えることだけを意味するわけではない。私たちには無意識の働きというものがある。これが勝手に、それまでに貯えたいろいろな他の知識との結びつきを作ってくれるし、それが働く場所も勝手に見つけてくれる場合も多々ある。頭を抱えて「この知識はどこで使えるのだ、他とどんな関係があるのだ」と悩まなくてもよいことも多い。そういう意味で「知識は創[注3]発する」と言ってもよいだろう。

もう一つは伝えられたことについてすぐに「なるほど」と思えるようなケースについてである。この場合は、伝えられた情報、あるいはその記憶から知識を構成するために十分な経験や関連した知識が存在している。だから努力している人へのアドバイスは、すぐに伝わるように見えるのだ。ちなみにこうしたことが自動的に行われる経験が、知識が伝達可能であるという信念を支えているのだと思う。一方で何もやっていない人には、同じことを言っても何も伝わらない。せいぜい記憶にとどまるだけだ。

最後の一つは、では記憶はなんの意味もないのか、ということについてである。それは「ある」、というか「ある時もある」というのが答えだ。さっぱり経験のない段階で何かのことを教わっても、ほとんどそれは意味がない。しかし、あなたは成長する、経験を重ねる。こうした段階になると、昔はちんぷんかんぷんだったことが意味を持つようになることがある。オ

（鈴木 宏昭「私たちはどう学んでいるのか」より）

（注1）「ブレトン・ウッズ体制」……第二次世界大戦以降の国際経済体制。
（注2）「赤と黒」……フランスの小説家スタンダールによって書かれた小説。
（注3）「創発」……個々の要素が相互に作用することで、要素全体が形成される現象。

問　一、――線①「多くの人には『知識なり、技能なりは伝えることができる』という信念がある」とありますが、多くの人がこのような信念をもっているのはなぜだと筆者は考えていますか。その理由が述べられている形式段落をこれよりも後の形式段落から探し、その段落の最初の五字を抜き出して答えなさい。

問　二、A ～ D にあてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号は一度しか使えません。

ア、だから　イ、つまり　ウ、さらに　エ、もし　オ、ところが

問　三、――線②「そういう知識」とは何ですか。文章中の言葉を使って、五十字以内で答えなさい。

問　四、1 ～ 3 には共通した言葉が入ります。あてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、妥当　イ、有用　ウ、特殊　エ、高次　オ、確実

問五、――線③「容易」と熟語の構成が同じものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、先生　イ、情報　ウ、定義　エ、記憶　オ、勝手

問六、――線④「知識というものは『属人的』なものなのだ」とありますが、それはなぜですか。その根拠となる一文を文章中から七十字以内で探し、最初の五字を抜き出して答えなさい。

問七、文章中には次の一文が抜けています。この文を入れるべき最も適当な箇所を文章中の[ア]～[オ]から選び、記号で答えなさい。解答には[　]をつけず、ア～オの記号のみで答えること。

だから情報の伝達、その記憶が意味がないというわけではない。

問八、筆者の主張として適当なものを次から二つ選び、記号で答えなさい。

ア、知識は持ち運んだり、誰かに渡したり、誰かから受け取ったりできるものである。
イ、知識とは様々な場面で使え、相互に関係し合っているものである。
ウ、意味のある知識とは、必要になったときにすぐさま起動できるものである。
エ、知識は伝達されたときに、瞬時に受け手に定着することは全くない。
オ、本を読むだけでは知識にならないが、それを覚えることによって知識となる。

五　次の古文を読んで、あとの問に答えなさい。

按察使大納言（「大殿」）の姫君は風変わりで、虫を大変かわいがっているというわさが広まった。

ある上達部の御子[注1]、うちはやりてものおぢせず、愛敬づき[注2]たるあり。この姫君のことを聞きて、「さりとも、これにはおぢなむ」とて、帯の端の、いとをかしげなるに、蛇のかたをいみじく似せて、動くべきさまなどしつけて、いろこだち[注3]たる懸袋に入れて、結びつけたる文を見れば、

はふはふも君があたりにしたがはむ長き心の限りなき身は

とあるを、①何心なく御前に持て参りて、「袋など。あくるだにあやしくおもたきかな」とて、ひきあけたれば、蛇、首をもたげたり。人々[注4]、心を惑はしてののしるに、君はいとのどかにて、「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」とて、「生前の親ならむ。②な騒ぎそ」と、うちわななかし、顔、ほかやうに、「なまめかしきうちしも[注5]、けちえんに思はむぞ、あやしき心なりや」と、うちつぶやきて、近く引き寄せたまふも、さすがに、恐ろしくおぼえたまひければ、立ちどころ居どころ、蝶のごとく、こゑせみ声に、のたまふ声の、いみじうをかしければ、人々逃げ去りきて、笑ひいれば、しかじかと③聞こゆ。「④いとあさましく、むくつけきことをも聞くわざかな。さるもののあるを見る見る、みな立ちぬらむことこそ、あやしきや」とて、⑤大殿、太刀をひきさげて、もて走りたり。よく見たまへば、いみじうよく似せて作りたまへりければ、手に取り持ちて、「いみじう、物よくしける人かな」とて、「かしこがり、ほめたまふと聞きて、したるなめり[注6]。返事をして、はやくやりたまひてよ[注7]」とて、渡りたまひぬ。

（「堤中納言物語」より）

（注1）「上達部」……官位の高い公卿（くぎょう）（貴族）のこと。
（注2）「愛敬づきたる」……「顔立ちが愛らしい」の意。
（注3）「いろこだちたる懸袋」……鱗模（うろこ）様の、紐（ひも）で首にかけられるようにした袋。
（注4）「人々」……姫君にお仕えしている女房たち。
（注5）「なまめかしきうちしも、けちえんに思はむぞ、あやしき心なりや」……「優美な姿の間だけは、著しくかわいがるというのは、まことに不埒（ふらち）な考えである」の意。
（注6）「したるなめり」……「したのだろう」の意。
（注7）「はやくやりたまひてよ」……「はやくやっておしまいなさい」の意。

問　一、――線①「何心なく御前に持て参りて」の解釈として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、何気ない風を装って姫君のところにお持ちして
イ、何気ない風を装って大殿のところにお持ちして
ウ、何ということもなく姫君のところにお持ちして
エ、何ということもなく大殿のところにお持ちして

問　二、――線②「な騒ぎそ」の現代語訳として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、騒ぎになるに違いありません。
イ、騒いではいけません。
ウ、騒ぐのも仕方がない。
エ、どうして騒ぐのですか。

問三、――線③「聞こゆ」の解釈として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、姫君の声が大殿に聞こえる
イ、大殿が女房達にお伝えになる
ウ、姫君が大殿に聞かせようとする
エ、女房達が大殿に申し上げる

問四、――線④「いとあさましく、むくつけきこと」の内容として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、贈り物に和歌が添えられていたこと。
イ、贈り物の蛇が作り物であったこと。
ウ、姫君が蛇を贈られたこと。
エ、姫君が蛇を怖がったこと。

問五、――線⑤「大殿、太刀をひきさげて、もて走りたり」とありますが、それはなぜですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、怖がっている姫君を助けるため。
イ、内心喜んでいる姫君をたしなめるため。
ウ、姫君の前で蛇を殺した人々を戒しめるため。
エ、姫君に蛇を贈った人物を懲らしめるため。

用紙ヨコ　上　こちらを上にしてください

令和5年度

高等学校入学試験問題　〔国語〕　解答用紙　（二月十三日）

注意事項

・解答は解答欄の枠内に濃くはっきりと記入して下さい。
・解答欄以外の部分には何も書かないで下さい。

氏名

受験番号

⓪	⓪	⓪	⓪
①	①	①	①
②	②	②	②
③	③	③	③
④	④	④	④
⑤	⑤	⑤	⑤
⑥	⑥	⑥	⑥
⑦	⑦	⑦	⑦
⑧	⑧	⑧	⑧
⑨	⑨	⑨	⑨

評価点

〈受験生はこれより上段には記入しないこと〉

一	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1

二	オ	エ	ウ	イ	ア

三	七				六	五	四	三	二	一
	エ	ウ	イ	ア						

四	八	七	六	五	四	三	二				一
							D	C	B	A	

五	五	四	三	二	一

一

1	急逝	6	キンカイ
2	慎（ましく） ましく	7	ソボウ
3	暫時	8	グドン
4	顕現	9	サクゴ
5	慮（る） る	10	サト（す） す

二

ア

イ

ウ

エ

オ

三

問一

問二　最初 ～ 最後

問三

問四

問五　20　10

問六

問七　ア　イ　ウ　エ

四

問一

問二　A　B　C　D

問三　50　40　30　20　10

五

問一

問二

問三

問四

問五

問六

問七

問八